



## はじめに

校長 中野 真幸

世界全体で社会環境が変化し、情報化社会への急速な転換が進んでいます。ここ日本においても、コロナ禍において社会全体が制限を受けました。また、オンライン化など労働環境の急激な変化、気候変動や急速な食糧・エネルギー環境の悪化など、これまで経験したことのない事態に直面しています。このように、現実としても我々が生活していく中で、自ら考え、自ら判断をする場面が出現しています。この出来事は、新学習指導要領が育成を目指す資質・能力の三つの柱を育む必要性を再確認する機会となったと言えるのではないのでしょうか。

本校では、これまで新学習指導要領の趣旨を反映させた授業改善に取り組み、児童生徒の主体性を育むための教育について研究を重ねてきました。そこでの研究の成果と課題を整理し、令和3年度から2年間の計画で「児童生徒の自立的・主体的な生活につながる授業実践・指導実践の取組」をテーマに掲げました。このことは、本校の学校教育目標に近づくためのものでもあります。

この全体テーマのもと、各学部・寄宿舎でサブテーマを設定し、研究と実践を重ねてきました。小学部は「自立活動の視点を踏まえた授業実践・評価・改善」中学部・高等部が「各教科等との関連を意識した作業学習の授業実践・評価・改善」としました。また寄宿舎では、「寄宿舎生の実態と手立ての共有」というサブテーマで、個別の生活指導計画の活用と目標を達成するためのPDCAサイクルによる手立ての改善に取り組みました。

初年度は、主体的・対話的で深い学びによる授業改善を行いながら、授業づくりシートの活用や改善、授業改善の取り組みを行いました。

今年度は、更に研究テーマに基づく各学部・寄宿舎の研究推進、授業実践とPDCAサイクルによる授業改善の取り組みを行いました。この2年間の研究をとおして、本校の児童生徒の主体的な学びの姿を共有理解し、それを目指した授業づくりに取り組んできたところです。多くの教員が授業づくりシートの活用に取り組み、「PDCAサイクルによる授業改善が図られ、計画の中身の吟味と共有が図られた」、「各教科に分けて考える視点の共通理解が進み目標設定や評価が図られたことにより授業改善につながった」などの成果を得ることができましたが、課題もあり今後も検討が必要です。

今回の研究集録をまとめるにあたり、これまでの取り組みを振り返り、児童生徒が将来、社会の中でたくさんの方々と共に、自分らしく、生きがいのある豊かな生活を送ることができる、このことに直結していけるよう、私たちは今後も研鑽を重ねていく所存です。

皆様には、是非御一読いただき、忌憚のない御意見をいただきますよう、また、これからも御指導・御支援を賜りますよう、併せてお願い申し上げます。

結びに、研究を進めるにあたり、御指導・御助言をいただいておりますことに心より感謝申し上げます。